

イデオロギーとテロル(四)

— 共產主義的全体主義独裁制における恐怖と狂気のシンフォニー —

小沼 堅 司

(目次)

一 「知識人の阿片」

林達夫「共產主義の人間」 〓 抽象的人民への愛と生身の人間の虐殺／ステイファン・ツヴァイク 〓 「思想の独裁」の恐ろしさ／モリス・マルクスのアイロニー／『共產主義黒書』 〓 共產主義のバランスシート／サルトル・カミュ論争 〓 革命的ニヒリズムと反抗的人間の倫理／階級的全体主義と人種の全体主義／レーモン・アロン、シモーニュ・ヴェーユ 〓 「知識人の阿片」としてのマルクス主義／政治的宗教によるロシア正教会と民衆文化の破壊／バートランド・ラッセル 〓 ポリシェヴィキの宗教的狂信と憎悪の独断論の告発／マルクス・レーニン主義の非情 〓 「餓死する民を救援するのは甘ったれた感傷主義である」／政治的宗教としての全体主義／ジョージ・オーウェル 〓 神なき宗教、メシアニズムの恐怖／『プラウダ』(真理)の社説以外に「イスチナ」(真理)はない／全体主義的救済 〓 プラトンの誘惑／指導者崇拜 〓 ナルシズム幻想の共同化／一つの事例 〓 北朝鮮全体主義に憑かれた人々

(以上二一七号)

二 全体主義の予備的、一般的考察

(一) はじめに—「カチンの虐殺」 〓 「民族浄化」と「階級浄化」の悲劇

(二) イデオロギーとテロル—ことばの起源と展開

(一) イデオロギー

(2) テロル

(以上一一八号)

(三) ナチズムとコミュニズム

(1) 第一次世界大戦と反ブルジョア——コミュニズムとナチズムの呼応関係

(2) ナチズムの政治的・精神的背景

(3) 人種主義(反ユダヤ主義)のレトリック——「自己投影のからくり」

(4) カリスマ共同体——M・ヴェーバー「人民投票の指導者民主主義」「人民投票的独裁制」の勝利か？

(5) スベクタクル政治——大衆／テアトロクラシー／神話／暴力

(以上一一九号)

(四) H・アレント、T・トドロフ、R・アロンの全体主義論

(以下本号)

全体主義政治＝全く新しい現象／モンテスキューの統治形態類型区分——「統治の本質」と「行動の原理」／全体主義の「統治の本質」＝テロル、「行動の原理」＝イデオロギー／大衆の支持と献身／「種族的ナショナリズム」／政党から運動の時代へ／全体主義運動＝「見捨てられた存在 (Verlassenheit, loneliness)」・大衆の自己救済／知識人エリートとの〈破壊の衝動〉と〈衝動の美学〉の充足／イデオロギー＝演繹的論証の強制／テロル／強制収容所＝根源的な悪／アレントの思想的抵抗拠点＝「事実に基づく真実」(factual reality)／ツヴェタン・トドロフの全体主義解剖／レイモン・アロンの「イデオクラシー」

(以上本号)

三 左翼全体主義——共産主義

(一) ボリシェヴィキによる権力奪取

(二) 「プロレタリアート独裁」と恐怖政治

(三) スターリニズム全体主義

(四) 毛沢東の大躍進政策と文化大革命の狂気

(五) 北朝鮮全体主義の悲劇

(六) カンボジア・ポルポト政権の虐殺政治

四 共産主義的全体主義の二十世紀

二 全体主義の予備的、一般的考察

(四) H・アレント、T・トドロフ、R・アロンの全体主義論

ハンナ・アレントは、『全体主義の起源』独語版(一九五五年)第三部第四章および英語版第二版(一九六八年)で追加された結論の章「イデオロギーとテロル」において、第三部のナチズムとスターリニズムの叙述を要約し、何が全体主義を従来の専制政治の諸形態と分かつかを説明している。周知のように『起源』は先例のない大規模な殺戮・残虐行為という悪夢のような恐怖の衝撃のもとに書かれたが、彼女は、これは規律のない暴虐の結果なのではなく、巨大な規模で組織され体系化されたものと捉えるべきであると主張した。そして、この全体主義の組織的、体系的な恐怖は、特有のイデオロギーの実現、特有の教義の合理的実現としてのみ理解できるといふ。それは、ナチスにあっては人種論であり、スターリニズムにあっては階級闘争論であった。ユダヤ人やクラークの死の運命は、人種的特性や階級的所属のためであった。これが歴史上無数にあった専制政治から全体主義を区別する本質的な要素である。すべては特有の教義(公理)からの首尾一貫した演繹の結果であった。それゆえアレントは、「イデオロギーとテロル」こそ全体主義の本質を構成すると捉えたのである。

アレントは、全体主義を本質的に現代的な現象とみていた。従来の専制政治、独裁政治、権威主義体制という範疇では捉えきれない新しい政治であると確信していた。アレントの論文「全体主義の性質について」によれば、専制的支配は「外的恐怖(フィア)」に基づくのに対し、全体主義は「テロル」による支配である。外的恐怖による

支配は公共の領域を「砂漠」に変える。ここでは、孤立した個人は互いに協力することをあきらめて無気力と無力感にさいなまれる。その意味では、恐怖はモンテスキューの意味での専制政治の「行動原理」である。

モンテスキューは、西欧の政治的思考の伝統において「統治の固有の構造」（国家構造）を理解するには、「統治の本質」と「統治の原理」（「行動の原理」）を区別する必要があると述べている。「統治の本質とその原理とのあいだには次のような相違がある。統治の本質とはそれをかくかくのごときものでありしめるものであり、その原理とはそれを動かしめるものである。」この抽象的な定義の具体的内容は次の通りである。君主政の本質は合法的統治にあり——ただし、この統治では権力はただ一人の人間に握られている——、行動は「名譽」（卓越性への情熱）の原理による。共和制の本質は立憲的統治にあり、行動は「美德」（平等への愛）の原理による。専制の本質は法なき支配であり、その行動原理は「外的恐怖」である。

モンテスキューのいう「統治の固有の構造」、つまり君主政、共和政、専制は、それぞれ自らを成り立たせている基礎、すなわち卓越性（名譽）、同等性（徳）、無力性（外的恐怖）という「行為の原理」を有するが、アレントは全体主義という先例のない統治の本質は「テロル」であると看破した¹。

全体主義のテロルは、専制におけるように恣意的に一個人の権力渴望の命ずるままに行われるのではなく、後に詳しく考察するように自然的過程の法則（人種闘争）と歴史的過程の法則（階級闘争）の実現のために執行される。全体主義のテロルは、「鉄の籠（たが）」をもって立憲国家の市民の間の自由な空間も専制に特有の孤絶と相互不信の砂漠も消滅させ、すべてが融合する巨大な一つの存在を創出しようとする。「劣等人種」あるいは「死滅する階級」に下した死の判決をたちどころに執行しようとする。人間の共同生活における行為は無用となる。それゆえ全体主義では、モンテスキューの「統治の原理」（行動原理）は脱落する。全体主義の権力者の行為は、「名譽」にも

「徳性」にも「恐怖」にも導かれてはいない。しかし全体主義的支配が完全にならない段階では、なおテロル機構に抱えられた人間を動かす独自の原理を必要とする。實際上問題になる行動原理は、専制政治におけるように「恐怖 (Furcht, fear)」であるように見える。

だが全体主義は行動原理を必要とはしない。全体主義支配のもとでテロルが客観的なメルクマールに従って犠牲者を選びはじめると、専制支配における恐怖を必要としなくなる。専制的な「法なき支配」における孤絶と相互不信の砂漠にもなお最小限の人間の接触、あるいはその希望はあったが、全体主義支配ではこの恐怖は事実上の意味を持つことをやめる。そのかわりに、「歴史」と「自然」が人間に運命として与えたとされ、テロルがその執行にあたる運動法則をいかに理解すべきかを人間に教えるものを持ちだす。それは運動法則の過程を洞察したいという欲望に応えるものであり、執行者と犠牲者の双方にこの過程を受け入れる準備をさせる。その準備はイデオロギーによって行われる。その意味でイデオロギーはモンテスキューの定義する公的行動の原理に対応する。(Ⅲ二八四、D九六一―九六二)

全体主義は、近代政治思想を悩ませてきた市民としての人間 (公共社会の一員) と個人としての人間 (私人) という二重基準を「解決」した。すべての立憲的統治は、他のすべての市民と同等のものとして権利を平等に享受し運命を分かち合う公的領域 (生活) と、他の誰とも異なる個人の領域 (生活) とを区別する。法は個人的な生活の境界線の内側には入ることはない。全体主義は、公共の領域から多元的個人を追放し、公共の自由を抹殺するだけではなく、個人の行為と個性に必要な領域を破壊することにより、自由そのものを抹消しようとした。全体主義は、そのイデオロギーに従って現実を作り変えるが、そのさい計測不可能なものを排除しようとする。つまり、テロルによる支配は人間を〈無力〉にするだけでなく、人間を〈無意味〉にしようとするのである。全体主義のみが、テ

ロールをモンテスキュー的意味での「統治の本質そのもの」としたのはそのためである。²⁾

このように全体主義は、「自然」もしくは「歴史」の「運動法則」を「加速化」するために「テロル」を「配備」する。「退廃期の死滅すべき階級」、「不純で劣等な民族」、「生存に適さない人間」は、全体主義からすれば歴史の灰置き場へ行くべく定められているからである。アレントが論文「人類とテロル」で書いているように、全体主義の究極目標は、「特定の人種に支配された社会であれ、階級や民族がもはや存在しない社会であれ、すべての個人が種の標本でしかない社会を形成し、維持する」ことであった。³⁾

全体主義の解釈では、すべての法は運動の法（法則）になる。それは立憲的統治における実定法を超える。近代の所有権や信仰の自由、思想・表現の自由、居住・移転の自由など人間の基本的権利や、歴史の中で培われてきた伝統や慣習を守り、継承するための実定法秩序は歴史のくずかごに投げ捨てられる。人種および弁証法的唯物論のイデオロギーは、人種の完成あるいは歴史的時間の終わりへ向かって疾走する運動の法則に依拠しているからである。過去の暴虐は、自由の空間を保護する法の境界を破壊して、人々を外的恐怖（フィア）のなかの不安と孤独の砂漠に追いやる。自由のために必要な空間を失った人々は、それでも隣人との最小の接触を保とうとし、空間のイメージを保持している。これに対して全体主義支配は、実定法的空間そのもののイメージの超克をめざす。全体主義は、一党独裁制と同様、この隣人のいない見捨てられた孤独の砂漠のような状況を利用するが、それ以上のものなのである。このような歴史的な運動法則と人種法則の必然性を加速させるために、「人間の無限の複数性と差異性」を消滅させ破壊するテロル装置が、強制収容所であり死の収容所であった。

全体主義の研究者を惑わせたのは、暴政的支配も全体主義的支配もすべての権力を一人の人間の手に集中させるという類似点であった。アレントによれば、暴君は自分の支配の安定を望み、他の敵対者によって権力が脅かされ

ることのないように、自分のみが自由意思をもとうとした——人類が一つの頭しか持たないことを望んだ古代ローマの皇帝ネロの狂った欲望のように——が、全体主義の支配者はそれとは違う。

「指導者の原理（フューラー・プリンシプル）はヒトラーにとつてと同様、あるいはそれ以上にスターリンによって用いられ、ただ一つの意志が支配下の全住民のなかで生き残るということだけでなく、人間の活動全般を配慮するには一つの精神だけで十分であるということ为前提として動いている。」

「全体主義の独裁者は、暴君とははつきり異なり、自分のことを自分の自由意思を執行する権力をもった自由な行為者と考えたのではなく、その代わりに、自分より高次の法の執行者だと考えたのである。（中略）こうした〈自然〉の模倣——ヒトラーの場合——、あるいは〈歴史〉の解釈——スターリンの場合——のために、全体主義的支配者は一人の人間だけが必要とされ他のすべての人びとも他のすべての考え方も厳密な意味で余計であると感¹じている。」

アレントは、共同の世界が瓦解して相互にバラバラになってしまった現代の大衆社会の個人化とアトム化が全体主義的な支配の成立にいかにも必要不可欠であったかを明らかにするには、ナチズムとポリシエヴィズムを比較するのが最上の方法であると述べている。両者は歴史的にも社会的にも、これ以上の相違は考えられない条件のもとで成立しているにもかかわらず、結局その支配形式と諸制度は驚くべき類似性を示しているからである。

スターリンは解体した社会という彼の運動に逃れ向きの条件に恵まれていなかった。そのため彼はレーニンが残した革命的一党独裁を全体主義的支配体制に作り変えるために、この条件を人為的に創り出さなければならなかつ

あつけないほど容易なポリシエヴィキの十月のクーデタは、ツァーリとその中央集権的専制機構はいかなる政治組織も社会組織も残さなかつたという事実を負っていた。巨大な無構造な民衆をなしていたロシアの人々の中には、農民も都市ブルジョアジーもプロレタリアートも育ち始めたばかりの芽でしかなかった。レーニンは、権力奪取がこれほど容易で、その維持がこれほど困難なところは世界のどこにもないといったが、彼の念頭にあつたのはロシア労働者階級の数的な弱さだけでなく、ロシア民衆の無構造な状態であつた。^⑤

アレントは『起源』第三部の冒頭で、ナチズムとスターリニズムという新しい政治現象を特徴づけるさいに注目すべきことは、「大衆の支持」と「支持者の献身」であると述べている。^⑥「全体的支配は大衆運動がなければ、そしてそのテロルに威嚇された大衆の支持がなければ、不可能」であつた。(Ⅲ二、D六五八、E三〇六) ここでいう「大衆」は、もはや階級や集団に所屬することができない人々、つまり「共通の利害で結ばれておらず、特定の達成可能な有限の目標を設定する個別的な階級意識をまったくもたない人々」(Ⅲ一〇、D六六七、E三百十一)であつた。かれらは「他人とのつながりを喪失」し、「根無し草」になつてしまつた。アレントによれば、このような大衆社会は、国民国家とともに十九世紀的秩序を構成していた階級制度と政党制度が崩壊した結果として到来した。この大衆のメンタリティは、「自己保存本能の定型的な退化」、「自分自身など問題ではない、自分はいつでも取り替えがきくという没我」の感情 (Selbstlosigkeit)、物質的利益への無関心 (Desinteressiertheit) とその根底にある「共同の世界」の喪失 (「無世界性」) といった特徴をおびていた。アレントがこの大衆において注目したのは――

「徹底した自己喪失というまったく意外なこの現象であり、自分自身の死や他人の個人的破滅に対して示したシニカルな、あるいは退屈しきった無関心さであり、さらに抽象的観念に対するかれらの意外な嗜好であり、何よりも軽蔑する常識と日常性から逃れるためだけに、自分の人生を馬鹿げた概念の教える型にはめようとまでするかれらのこの情熱的な傾倒であった。」（Ⅲ二十一、D六八〇、E三一六）

ハンナ・アレントは、この「徹底的な自己喪失」と破壊衝動こそ全体主義体制を成立させた大衆的基盤であると、
して次のように述べている。

「おそらく憎悪というものは、いつの世にも存在していたろう。しかしいまや憎悪は、あらゆる公的な事件における決定的な政治的要因にまで肥大してきた。（中略）ところで現代の大衆を過去の諸時代のモツブから区別するものは何かといえ、それは自己喪失であり、自己の泰平無事への無関心である。……この自己喪失は無私といった善ではなくて、自分の自我がいつどこでなんらかの別の自我に置き換えられようがいつこうに構わない、自分なんてものは知ったことじゃない、といった感情なのだ。……このような徹底的な自己喪失の現象は、いいかえれば、大衆が自分の死にも無関心にシニカルに退屈しきって相対するという現象は、誰も予想のほかだった。……こういう現象は、健全な知性と判断力が根底から失われているという病状を、また、もっとも基本的な衝動である自己保存衝動が劣らず根底から無力化しているという病状を示している。」（同）

アレントが指摘しているように、この自己喪失の状況においては、攻撃性は他者に対してだけでなく自己——劣

等で無価値で醜悪な自己——にも向けられ、自己破壊的行動を生み出す。そして集団的自己破壊衝動は、病的に凶暴化した集団的攻撃性と化す。フロイトは、このような事態を説明するために「死の衝動（タナトス）」という仮説を提出した。フロイトによれば、死の衝動は第一次的には自分自身の生命の絶滅に、そして第二次的に他者の生命の絶滅に狙いをつける。自己を喪失した大衆が示す既成秩序への憎悪と異質なるものへの狂気の迫害、戦争への憧れと止むことのない暴力崇拜の底には、深刻な自己憎悪と無力感に打ちひしがれた自己の補償欲求があった。ヒトラーが、わたしは「未曾有の巨大な戦い」のために諸君に死を要求すると叫んだとき熱狂的にこれに答えたのは、このような自己喪失と自己破壊衝動にとりつかれた人々であった。儀式や行進や制服、綱領やイデオロギー、指導者装置は、ゲシュタポやゲー・ペー・ウー、そして究極には死の強制収容所をめざす連中にとっては必要——そして不可欠な——舞台装置であり、心理劇と政治劇の効果をたかめる装置であった。アレントは、このような深刻な自己喪失・自己破壊的行動と集団的攻撃性について、次のように述べている。

「全体主義プロバガンダの成功は、そのデマゴギーの故というよりはむしろ、それが次のことを理解していたからである。すなわち、利害というものが集合的な力として重要性をもちうるのは集団別に組織された社会、つまり大衆化されていない社会においてのみであり、安定した社会的共同体が崩壊してしまえば個人の利害を集団の利害に変えるトランスミッション・ベルトもまた同時に消え失せる、ということである。プロバガンダがいかにむきになって物質的利害に訴えようと、相手が大衆の人間であっては何の効果もない。(……)それ故に大衆の人間には、普通の政党の党員の忠誠心とは明白に異質な、自分の声明を犠牲に捧げることさえ厭わないあのフアナティックな献身が可能なのである。ナチは『勝利か破滅か』(Sieg oder Untergang)」というスローガンに

よって、一民族全体を戦争に引きずり込むことが可能だということを立証した。しかもそれは全般的貧困と失業の時代ではなく、国民の野心の挫折した時代ですらなかったのである。この不気味な絶対的没我的世界がナチにとつていかに格好の住処であったかを示しているのは、すでに敗色の明らかになった戦争末期にナチが行ったプロバガンダである。それはこう約束していた——総統は『慈悲深くも、不幸な戦争終結を迎えた場合のために全ドイツ民族にガスによる安らかな死を用意している』と。（Ⅲ七四、D七三九、E三四八）

アレントの考察によれば、ヨーロッパの大衆は、すでにアトム化していた社会の解体による国民のアトム化によって成立した。「この社会においては、個人間の競争とそこから生じる孤立感を一定の範囲に抑えていたものは、各個人は生まれると同時に一つの階級に属し、成功と失敗に関わりなくその階級を故郷として終生そこに留まるという仕掛けであった。」大衆社会の中の個人の特徴は、「他人との繋がり喪失 (Kontaktlosigkeit)」と「根なし草的性格 (Entwurzeltheit)」であったが、彼らがかつての国民国家の階級社会の記憶によって結び付けられていた限りでは強いナシヨナリズムの感情に捉えられた。ナシヨナリズムこそ「階級対立を超えて国民を統一する接着剤」であったからである。全体主義運動の初期の指導者が利用したのはこの感情であった。（Ⅱ二十一二十三、D六八二、E三二七）

このような大衆は、一九世紀的秩序の解体の結果であった。アレントが全体主義論（第三部）に先立って、第二部「帝国主義」で、一九世紀的秩序の構造とその解体を考察したのは、そのためである。彼女は、一九世紀的秩序とその解体を「国民国家」と「社会」という枠組、および「帝国主義」という枠組で分析している。^⑧

アレントによれば、階級を基準に区分けすることができないあらゆる種類の脱落者（デクラッセ）のより集まり

である大衆は、ヨーロッパでは新しい現象であった。この現象が前面に出てきたのは、政党制の基礎であった階級制度がこの脱落した大衆の重圧に耐えきれずに崩壊して、政党制そのものが機能しなくなった第一次世界大戦後であった。従来の政党はどれもこの大衆を受け入れる用意はなかった。大衆の重要性、その新しい指導者の型を評価することもできなかった。国家や議会ばかりでなく政党もまた民衆との繋がりを失った。(II二二四、D五四七、E二六一)

アレントは、共産主義運動であれファシズム運動であれ二十世紀の諸運動が成功したのは多数政党制の国々であり、アングロサクソンの二大政党制は議会外運動の危険に対して免疫性を持っていたことに注目し、イギリスの政党制と大陸、とりわけドイツとオーストリアの多数政党制の相違について考察している。(第二部「帝国主義」第四章第三節「政党と運動」) 二大政党制では、政党は市民、つまり公的・政治的資格のある人々の政治組織であり、一方の政党は常に政府と同じであり、権力を握り、国を統治する。政党は権力と国家についての空論に耽る謂われはなく、政党の上にはそびえる国家というものは存在しない。そこでは利害の理論的正当化などは不必要であり、イデオロギーの発展は阻止される。(II二二五、D五三六、E二五四)

他方、権力と国家から切りはなされていた大陸の政党は、黨員を権力掌握の目的のために組織しているのではなく、本来は私的利害を持つ私的個人を代弁しているだけだった。それは公的問題に無関心な私的個人の集合体としての政党しか知らない制度のもとでは、一方では共通の利益の保護を国家に要求し、他方では人民の犠牲的精神に依存することになり、いずれにせよナショナルな情熱を刺激する方法しか知らなかった。「大陸の政党制が社会の階級制度を反映すればするほど、国民は一層全国的利害の民衆的表現であるナショナリズムを必要とするようになった。イギリスは与党と野党の交代による政党の直接的統治があったために、このようなナショナリズムは不必

要だった。」(Ⅱ二一七八、D五三九、E二二五)

権力奪取は国家機構が政党と市民の頭上に漂っている場合の方が容易であり、権力の世界観的神秘化を伴うプロパガンダ運動も市民が実際に権力から切りはなされているところの方が成功しやすい。大陸諸国の政治生活形態を形作ってきたこのような権力からの疎遠と密接な関係があるのが、政府からの人民の疎外であり、それは議会や政治的諸制度すべてに向けられていた憎悪に表現されている。

全体主義運動の先行者であり、全体主義がプロパガンダの材料として利用した汎民族運動が勢力を伸ばしたのは、このような大陸型政党制の国であった。ナチスの汎ゲルマン主義もポリシェヴィキの汎スラブ主義も、西欧の海外帝国主義的膨張が地球再分割に成功して締め出しを食わされたとき、「自分たちにも他の大民族と同じく拡張する権利があり、海外でのその可能性が阻まれるならヨーロッパの中でそれを実行するしかない」と考え、「大陸国家」の弱小民族の中間地帯諸国を分け合うべきだという点で意見を同じくしていた。英仏の海外帝国主義がなお、曲がりなりに国民国家の代議政治と政党政治に依拠し、ブルジョアジーは過剰な富と過剰な労働力の輸出先である植民地に対する対外政策に関与し続けたのに対し、大陸帝国主義ではブルジョアジーは帝国主義になんら関与せず、汎民族運動はもっぱら政治的、イデオロギー的運動であり続けた。前者はあらゆる階級から集まった社会の層(モップ)に脱出口を提供したが、後者が提供したのはイデオロギーと運動であった。とくにそれは、崩壊の進む社会秩序の中でアトム化した大衆に何らかの帰属感を与えるという役割を果たした。(Ⅱ一六六、D四七八、E二二五)

イギリス帝国主義者は「イギリスの将来は海にかかっている」と考えたのに対し、汎ドイツ主義者は人種イデオロギーを直接政治に転化して、「ドイツの運命は血にかかっている」と主張した。汎ドイツ主義者は「国家」と国民意識に対立するものとして、歴史・言語・居住地と関係なく同一民族の血を引くすべての人間を包括すべき「拡

大された種族意識」を持ち出した。(Ⅱ一六四、D四七六) 民族の本質は土地ではなく血であった。「伝統、政治的諸制度、文化など、自民族の目に見える存在に属する一切のものを基本的にこの『血』という虚構の基準に照らして測り断罪する」という点こそ、種族的ナショナリズムを他と識別し得る特徴である。(Ⅱ一七〇、D四八二、E二二七)

種族感情は、単なるナショナリズムには及びもつかない力、大衆を陶醉させる力を備えていた。それはドイツの覇権のもとにゲルマン化された中欧、あるいはロシアの支配下に立つスラブ化された東欧と南欧をめざす大陸帝国主義のイデオロギー的教義となった。それは世界征服のメシア的使命感を生み出し、政治的領域から出発して人間生活のあらゆる領域に浸透していった。そしてやがては、「*pan*」という形容詞は、人間の精神内部の問題を含めて使われるようになった形容詞“*total*”へと転化していった。(Ⅱ一六七―一六九、D四七九―四八一、E二二五―二二七)

繰り返しになるが、アレントは、汎民族運動と全体主義との密接な関係に注目し、この汎民族運動を支えている最も重要な意識と運動として「種族的 (*völkisch*) ナショナリズム」をあげている。汎民族運動は、アレントが「海外帝国主義」と区別して「大陸帝国主義」と呼んだ、植民地を隣接する国々に求める対外膨張策によって覚醒された運動であった。それは、膨張先に住む自民族に対しては離散した「民族共同体」の再建をめざすナショナリズムであり、その地の他民族に対しては「劣等民族」として支配することをめざす運動であった。この汎民族運動が提供したのは、自民族に独特な「魂」(精神)や「血」といった想像上の属性、架空の観念による「不明確なエスニックな共同帰属感」としての「種族的ナショナリズム」であった。

アレントは、汎民族運動の提供するこのナショナリズムは、すでに「西欧型ナショナリズム」と区別される

「東・中欧型ナショナリズム」に胚胎していたと捉えている。西欧では「国民国家」は、絶対王政の時代に発展した領域的な主権国家をネーションの原理で再構成した政治体制であったが、そのさい決定的に重要な要素は、特定領域内で根を下ろした人々の歴史的・文化的統一体としての自覚である。すなわち、ネーションを構成するのは、(一) ある領域内で定住する人々、(二) 歴史的・文化的統一体、(三) その一体性の意識、さらに(四) この領土に刻まれた過去の共同の経験(歴史の共有)と、(五) この土地に結び付けられた子孫の運命の共有である。言い換えれば、民族(people(s), Volk (Völkler))は歴史的・文化的統一体としての自覚を契機にして自らを国民(nation(s), Nation (en))へと形成する。アレントは、典型的な国民国家の誕生をフランス革命にみているが、この西欧型ナショナリズムにおいては、「国民」であること(法的・政治的意味での市民権の範囲)と「民族」であること(歴史的・文化的一体性の意識)がたまたま重なっていた。これがずれるとき、ネーションの原理は既存の政治秩序を不安定化する要因になる。

この西欧の国民国家においては、「全体に共通の利害を象徴的にも実際にも代表する国王がもはや存在しないため、市民を結ぶ唯一の紐帯は国民的なるもの、共通の起源だけとなった。」住民の各階層が個別の階級利害、集団利害に支配され、政治がこれらの利害闘争で消耗したとき、共通の国民的利害を保障するのは、すべての階級と集団に共通する特定の心情としてのナショナリズムであった。この点でナショナリズムは「中央集権化された国家とアトム化した社会を繋ぐ不可欠な接着剤」となり、同時に同じ国民に属する人びとを結びつけ、「危機に際して威力を発揮する共同帰属感」となった。(Ⅱ一七七、D四九〇、E一三三)それゆえ、ナショナリズムは国民国家の市民の中に最低限の公的・政治的関与と公益への関心を維持させる機能を持っていた。他方、国家は領土内の住民すべてを民族的帰属とは関わりなく法的に保護する義務を負っていた。

これに対して東・中欧型の場合は、国民と民族のずれが最初から存在した。東・中欧型においては、ナシヨナリテイと領土および「人々が参与する共同の世界」との結びつきは存在しない。それゆえ、これらの地域の諸民族のナシヨナリテイの意識は、「不明確なエスニック (volkkrati, ethnic) な共同帰属感」以上のものではなかった。既存の国境線と「ネーション」を構成すると想定される人間集団の居住地域が一致しないため、離散状態を回復して「ネーション」の一体性を「回復」しようとする運動は、しばしば国家の領域を流動化し、国家に領土的膨張の口実を与えることになった。エスニックな共同帰属意識に基づく共同体ははまだ政治単位として実現していない以上、未来において実現されるべき目標ではないからである。そのさい、「誇りうるのは自分自身だけ——せいぜい言語……悪くすればスラブの、あるいはゲルマンの《魂》だけ」であった。(Ⅱ一七八―一七九、D四九二―四九三、E二二二―二二三)

種族的ナシヨナリズムは東欧・南欧のあらゆる被抑圧少数民族に広まったが、それらが汎民族運動という新しい組織形態を生んだのは、すでに民族を代表する国家を持ち、しかも他の国でも大きな民族集団として存在していたドイツ人やロシア人においてであった。海外帝国主義がその膨張欲にもかかわらず「白人の責務」や「白人の使命」といった相対的な優越性で満足していたのに対し、汎民族運動は、自分たちは神に選ばれた民族であると主張した。とくに汎スラブ主義における種族的ナシヨナリズムは、「疑似宗教的理論と神聖の観念」を生んだ。(Ⅱ一八〇、D四九四、E二二三)

アレントは、この汎民族運動の魅力について次のように述べている。

「個人主義的に理解された人間の尊厳に代わるものとして、種族的思考においては、同じ民族に生まれやすべ

ての人間は互いに自然的な結びつきを持ち同一家族の成員間と同じように相互に信頼し合えるという觀念が登場した。そしてこのような觀念の与える温かみと安心感は、アトム化した社会のジャングルで近代人が当然感じる不安を和らげるには、事実きわめて適切なものだった。運動が人間をマスとして捉え画一化することによつて社会的故郷（ハイマート）と安心感の一種の代用品を提供し得るということを、全体主義運動は汎民族運動から好都合にも学ぶことができた。」（Ⅱ一八四、D四九九）

汎民族運動は自民族の起源が神にあることを説き、人間の起源が神にあることを信じるユダヤ教・キリスト教に對抗した。その論理によれば、人間はすべていづれかの民族に属すのだから、その民族が神のものである場合にのみ人間は自己の起源が神にあることを主張する権利がある。民族は神と人間の仲介者として現われる。個人は民族的帰属を喪失すると神的起源を失い、自由主義の世界観と語彙の場合におけるように人間の尊厳と人権に訴えることができなくなり、いわば人間以下のものになる。この疑似神学としての汎民族運動は、国民的解放を遂げない諸民族の種族的意識の発展にとつて政治的にきわめて有効であった。この選民性の主張においては、自民族と他のすべての民族との間に絶対的な差別を設け、その差別の前では他民族間の相違が消失するだけでなく、自民族の成員の間の社会的、経済的、心理的格差まで色褪せてしまう。

アレントは、この汎民族運動の危険性について次のように述べている。

「種族主義と人種主義の妄想的觀念は、全面的責任という全く見通しも利かない複雑さと堪えがたい重荷とを免れるには、非常に破壊的とはいえ現実的な逃げ道である。西欧の国民的土地共同体に對抗して血の共同体を強

調したことは、土地に根を持たぬ東欧および南欧の諸民族の要求にきわめて正確に対応するものだったが、同時にそれ以上とは言えないまでも大都会の根なし草的大衆の必要にも合致し、それゆえに全体主義運動のあれほど重要な構成要素になったのである。ポリシェヴィズムは反ナショナルな教義のうちで最も重きをなすマルキシズムを狂信的に神格化したのが、それと矛盾するにもかかわらず汎スラヴ主義の諸観念をプロバガンダに使うことを辞さなかった。なぜならこれらの観念は、一民族を他のすべての民族から——たとえ同じ生活圏の条件のもとにある他民族からであろうと——隔絶させるのに絶大な効能を持つことが判明したからである。」(II一八六、D五〇一、E二三六)

「いつしかの画一的、全体主義的『集団性』*Massenhaftigkeit*が準備され、そこでは個人は実際に自分を一種の標本としか感じなくなるのである。」(II一八二、D四九七、E二三四)

階級制度の崩壊と大衆社会の到来は、《政党》の時代から《運動》の時代への移行を意味した。アレントのいう「政党」とは、「利益政党、世界観政党として国民国家の諸階級を政治的に代表するか、あるいはアングロサクソン諸国の二大政党制におけるように、公的問題の取り扱いに対してその時々々に一定の見解と共通の利害をもつ市民を組織するかのいずれかである」(III六、D六六三、E三〇八)が、大衆社会の到来によってこの意味での政党は無力な存在になってしまい、それに替って「運動」が政治の中心に姿を現した。《大衆の政治化》としての「運動」は、「共同の世界」から切斷され、自分は無力で無意味な存在だと考えている人々に、意味と力を与えてくれたからである。アレントによれば、全体主義は、なによりも、自己の存在理由と意味を与えてくれる教義と組織に献身しようとする《大衆》の《運動》であった。

全体主義権力は《運動》なしでは存続しえない。なぜなら権力を掌握し、国家機構と暴力装置を独占することによって新たな秩序を打ち立てるが、この新秩序における生活関係と心理の《安定化》Ⅱ《日常化》は、全体主義の擬制の心理的支柱、即ち現実の世界に対する大衆の積極的なルサンチマン——これによって大衆を「不可能が可能であり、信じられないことが真実であり、世界で起こるすべてのことはただひとつの観点から説明される」と信じさせた——を減少・消滅させてしまうからである。そのとき、大衆は《正常化》し、以前の惰性的人間に戻る。権力はこの現実には依存せざるをえなくなり、運動にとって不可欠であった《事実性の無視》を堅持することが難しくなる。権力は日々の統治において客観的な条件に順応せざるをえなくなる。そのとき全体主義運動の革命的情熱は衰退する。経験的理性は、革命の精神から生まれた新しい制度と法律が公布され国内反対派が一掃されたならばテロルは終わるであろうと信じていた。しかし現実には、反対派が衰退し相対的安定が実現したかと思われたときに、テロルは強化された。一九二〇年代でも内戦期でもなく、反革命的反対派も党内反対派もことごとく一掃されていた三〇年代以後になって、ロシアにおける真の恐怖政治は始まった。革命的独裁の終わりと社会主義権力の制度化の始まりを画すると考えられた憲法の制定・公布も、このような事態を変えはしなかった。むしろ憲法草案の作成に関わった人々のうち、検事総長ヴィシンスキーだけを除いてすべて裏切り者として殺してしまったのである。(Ⅲ一五二、D八二七、E三九五)

既に述べたように、全体主義運動の特徴はメンバーから未曾有の献身と忠誠を引き出したことである。「全体主義運動の会員にとっては、自分がおよその世界に存在し一つの場所を占めているのは、ひとえに自分が党に加わっているからであり、党が自分に与える任務のお陰なのである。」(Ⅲ三六、D六九八) こうして全体主義運動は、

無力で無意味な大衆を組織し、他の人々の主張だけではなく彼ら自身の信念をも無視して全面的な要求をする。また運動の成員は、当惑するような変更が指導者から命じられても、その方針に従うことが期待されている。

アレントは、このような全体主義運動が、とくにその台頭期において多くの知識人エリートを惹きつけた「魅力」にも注目している。社会の偽善や俗物主義を憎悪する知識人や芸術家たちは、偽善的な社会と文化に対する徹底的な《破壊の衝動》とその《衝動の美学》に惹きつけられていた。階級制度の崩壊と政党制度の機能不全にさらされた大衆を捉えたアナキックな絶望は、エリートの革命的気分にとってもモップの犯罪者の本能にとっても歓迎すべきものであった。エリートは一切の既成の価値に対する嫌悪と、一切の既成の諸勢力に対する侮蔑を抱いていた。それは第一次世界大戦前から彼らを捉えていた精神的絶望の一部であった。戦争が始まったとき「ひざまずいて神に感謝した」（『わが闘争』第一部第五章）のはヒトラーや人生の落伍者だけではなかったのである。

「前線世代は、人為的な安泰とみせかけだけの文化と看板だけに成り下がった《価値》のこの偽りの世界が、廃墟と化するのを見たいという切望以外にはほとんど何の願いも抱いていなかった。」（Ⅲ四三、D七〇六、E三二八）

「徹底的な破壊と混沌と廃墟そのものが最高の価値の座だったのである。」（Ⅲ四四、E三二八、英語版での追加）

「この世代にとって第一次世界大戦は、階級の瓦解と大衆化の壮大な序曲となった。絶えざる恣意的な殺人を伴った戦争は、『偉大なる平等主義者』たる死の象徴（Symbol für den "grossen Gleichmacher" Tod）となり、それゆえに新しい世界秩序の真の父になった。」

「ヒトラーが活動を始めたのは、ヨーロッパの現状回復がモツブの野心にとつては最大の危険と見えた時期だったが、彼はこの時期には、ほとんどもっぱら前線世代のこのような感情にのみ訴えかけていた。大衆化した人間に特有の没我性 (die spezifische Selbstlosigkeit des Massenmenschen) は、この人々にあつては無名性への憧れ、純粋な一機能としての歯車になること、いわゆる〈より大きな全体〉没入することへの憧れとして現われていた。ということは、自分の偽りのアイデンティティを、自分が社会の中で演ずるべき役割や与えられた機能とともに消してしまうことに役立つような変化ならば、どんな変化でもいいのである。戦争は、個人間の一切の差異が消え失せる最も壮大な大衆行動として経験されたため、今や苦しみすら、「集団的苦しみ」として「歴史的進歩の手段」とされてしまった。」(Ⅲ四五、D七〇七、E三二九)

さらに、「社会の悲惨と上流階級の偽善と時代の精神的危機に深く傷ついていた」前線世代の反人道主義、反個人主義、反文化的衝動は、それ特有の表現、つまり暴力、権力、残虐を求めてやまなかった。無名性と自己放棄への欲求は、暴力に対する異常な欲求と表裏の関係にあった。超人間的な破壊力の展開に身を投じることによって偽善的で無意味な世界から自らを解放しようとした。アレントは、これらの人々をひきつけた全体主義の「行動主義 (Aktivismus)」には、二つのものが融合していたという。それは一切の考慮を「洗い流してしまった」純然たる行動と、人間の理解を越えた純然たる必然性の圧倒的な力に対する信仰とであった。それは全体への渴望に対応する全体的破壊衝動であった。

「知的エリートがモツブと同じく全体主義のテロルに惹き寄せられたのは、そこに言葉の真の意味におけるテ

リズム、一種の哲学となったテロルがあつたからである。テロルは政治的行為の表現様式そのものとなり、自己を表現し既成のもの一切に対する自分たちの憎悪と盲目的な怨恨を表現する手段となつた。」(Ⅲ四九、D七一
一、E三三三一一二)

このように、エリートが破壊の衝動とその美学に引き付けられたのは、ブルジョアジーの偽善に対する侮蔑と怒りであつた。既成の社会秩序を支えていると見えた「偽善的二面性」を打破するためなら、「残虐や非人間性や非道徳性」の一種の誇示は革命的に見えた」のである。(Ⅲ五三、D七一五、E三三三四)

すでに述べたように、アレントによれば、ヨーロッパの政党制度においては、各政党は個別的な階級利害・集団利害を代表するものとして組織されており、それゆえ政党は決して全体性を主張せず、逆に意識的に全体の一部として行動した。個々の政党員は階級もしくは集団の一員として代表されているのであつて、決して彼の人間としての全体性において代表されているわけではなかつた。これに対して、全体主義運動はそもそも初めからして、自分たちは万人を組織する世界観政党であり、この世界観に基づいて人間を全人的に要求すると主張した⁹⁾。この「全人的要求」の根源にあるのは、国民国家の階級制度の崩壊のなかで政治的、社会的故郷を失つたという事情であつた。

全体主義運動を支えたものは、一方ではイデオロギーとプロバガンダ、他方では全体主義組織(党)と支配機構(秘密警察・強制収容所)であつた。全体主義のイデオロギーは人種主義と共産主義であつたが、これは当時の政治状況において人種主義と階級闘争が政治的に重要であつたためである。アレントは、この「イデオロギー的思考

の特徴をなす三つの全体主義特有の要素」として次の三点をあげている。すなわち第一に、イデオロギーは「存在するものではなく、もっぱら生成するものを説明しているにすぎない」ことである。第二に、イデオロギーは経験的な現実よりも「より正しく」「より深い」現実を把握していると自称する。第三に、この「経験および経験された現実からの思考の解放を、その独特な論証方法に頼って行ったこと」である。つまり、現実を無視して設定された絶対的な前提（法則）から完全な一貫性をもってすべてを演繹するという方法で、現実の事実を処理するやり方である。このやり方は、法則の例証として役立つ事実のみを《事実》として取り扱う。この演繹的論理の強制こそ全体主義イデオロギーの特色である。（Ⅲ三三三四、E四七〇―四七一／Ⅲ二九二二三、D九七〇―九七二）

二人の全体主義的支配者は、論理的演繹によるイデオロギー的論証を武器にして、「氷のように冷たい推論」（ヒトラー）や「論理の不可公的な力」（スターリン）をもって「死滅すべき階級」は死ぬべく定められた人々からなり、「生きる資格のない」人種は根絶されねばならないという結論を引き出した。（Ⅲ二八七―八、D九五五―六／Ⅲ三三三六、E四七一―四七二）ナチスはこの論理の強制力によって、経験を信じなくなった人々に確信を与えた。それによって、いかに生きるべきかについてのオリエンテーションは消滅して、強大な流れに身を委ねなければならぬという自己自身への強圧が現われるのである。イデオロギーに内在する演繹的思考の自己強制は、人々から「事実」と仮構との区別」（経験の現実性）と「真と偽の区別」（思考の基準）の能力を奪い、テロル体制を支え、推し進めるのである。（Ⅲ三二八、E四七四）

同様にポリシェヴィキは、味方から「自白」を引き出すとき、この「容赦のない弁証法」を利用した。その論法は次のようなものである。歴史は階級闘争である。この闘争を進める党の判断はいつも正しい。党は歴史の必然性の過程で不可避的に生じる犯罪を処罰しなければならぬ。党はその犯罪のために犯人を必要とする。お前は罪を

犯した——それゆえ歴史Ⅱ党の敵だ。お前は罪を犯しておらず、犯罪者の役割を演じることを拒む——その拒否そのものによって、お前に着せている罪を犯したことになる。このような「イデオロギーの演繹的論証に基づく必然的推論の専制」(内的強制)によって自己をテロルの外的強制にはめ込み、この強制に同調させるのである。(Ⅲ一九一、D九六七)

アレントは、全体主義イデオロギーを「生と世界のすべての神秘を説明する鍵を見つけたと触込む主義」と定義している。その定義によれば、反ユダヤ主義はアリア人を讃えユダヤ人を憎むということにとどまっている限りイデオロギーではない。それがイデオロギーになるのは、歴史全体がユダヤ人に密かに操られているとか、永遠の人種の闘争に晒されているとか説き明かすふりをするときである。同様に、社会主義がイデオロギーとなるのは、すべての歴史は階級闘争の歴史であるとか、プロレタリアートは永遠の法則によってこの闘争に勝つことになっているとか、そのとき階級のない社会が訪れるとか、最終的に国家は消滅するとか吹き込むときである。つまりイデオロギーは「生と世界を説明する体系」であり、実際の経験との一致を求めることなしに「過去と未来すべてを説明する」と主張する。

この経験的現実の無視あるいは超越はイデオロギーとテロルの連結を示唆する。イデオロギーが経験的現実との整合性を無視して、過去と未来の「生と世界を説明する体系」であると主張するとき、イデオロギーはテロルへの道を整備する。「現実と経験からのこの傲慢な解放は、イデオロギーとテロルが連結する徴候を示している」のである。経験的真相(リアリティ)がイデオロギーの主張する「真相」に適合しないなら抹殺され、改変され、新しく捏造される。それに抗議・抵抗する者は容赦なく弾圧され、強制収容所に追放され、殺戮される。テロルはイデオロギー(「人種法則」や「歴史法則」)の「真相」を実現する推進力となる。全体主義は、テロルを重要な推進力

としてイデオロギーの内容を生きた現実に変える。ナチズム運動が全体主義的となったのは、人種主義の信奉者を組織したからではなく、人びとを客観的な人種の基準に従って組織したからである。人種のイデオロギーは、ナチス・ドイツの「生きた現実」を構成したのである。結婚相手も職業選択も食物摂取の量も、このイデオロギーによって決まる。全体主義は世界を人種的な現実に変えようとしたのである。同じように、マルクス主義イデオロギーによれば、革命の後にプロレタリアート独裁を通じて徐々に階級構造は死滅していくはずであった。共産主義全体主義は階級なき社会というイデオロギーの「真実」(「歴史の法則」)を現実に変えるために大量殺戮の肅清政治を強行した。標的はいわゆる「ネップマン」や小ブルジョアだけではない。民衆の暮らしの流儀に従って相互に助け合い、季節循環儀礼や通過儀礼など自然と宗教の時間を大切に、子供成長を何よりも楽しみにするといった農民や労働者など普通の人びとも、このイデオロギーの真理に疑義を唱えれば犠牲になる。アレントがいうように、「すべてを一つの支配的な要因に還元するようなイデオロギーの整合性は、一方では世界の不整合性と、他方では人間の行為の予測不可能性とも対立する。テロルは世界を整合的にし、その状態を維持するために必要とされる。つまり、テロルは人間が自発性とともに、とりわけ人間的なものである思考と行為の予測不可能性を失う地点まで人間を支配するのである」¹⁰。

全体主義において恐るべきことは、〈すべてが許されている〉という傲慢だけでなく、〈すべてが可能である〉という確信である。これこそ、「イデオロギーを現実へと変える全体主義の根底にある信念」である。そこでは真理と虚偽の区別そのものが消滅する。また、たとえばブルジョアジーは死滅しつつあることが真理なら、すべてのブルジョアジーを殺すこと(テロル)が許されるし、可能でもある。この推論は、内容の真偽とは関係なく独立した論理となる。この単純ではあるが厳密な論理性が全体主義運動と体制の構造を貫いている。現実の経験と生身の人

間から切断されたイデオロギー（真理）の命令を受け入れると、「論理的操作の殺人ネットワーク」（アレント）から抜け出すことが困難になる。

アレントが繰り返し強調したことは、このようなテロルは社会と制度の崩壊によって孤立し孤独となった諸個人を束ね合わせ、そうすることによってこういう個人をいっそう孤立させるということである。

「ヒトラーはすでに原子化された社会の堅い基礎の上に組織を打ち立てることができ、その原子化をさらに人為的に推し進めた。スターリンは同じことを行うために、小農民層を残酷に絶滅し、労働者を根こぎにし、行政機構と党の官僚制を繰り返し粛清しなければならなかった。〈原子化された社会〉と〈孤立した個人〉という言葉が意味するのは、人びとが共通のものを何ももたず、世界の目に見え触れることのできる領域を分かちあうことなく生きている状態である」¹¹

このように現実から想像へ逃避し、虚構の世界を求めることが、全体主義の大衆プロパガンダの前提条件である。それゆえ、全体主義のプロパガンダは、（一）大部分が予言からなり、この予言を実現するために世界を変革しなければならぬと主張する。（二）そしてこの実現を妨げようとする秘密の陰謀を不断に宣伝し、（三）イデオロギーを通じて経験的事実の中に隠された意味を暴露し、（四）支持者には全体的な説明を提供する。このような全体主義のプロパガンダの魅力は、経験的リアリティを失った大衆に、リアリティの代用品となる虚構の首尾一貫した体系を提供することにある。このイデオロギー的虚構は、人との繋がりでも物との繋がりでも生活関係を失って「投げ出された状態（Geworfenheit）」におかれた大衆、社会的結合から孤立して「見捨てられた状態

（Verlassenheit）」にある大衆に対して、とにもかくにも人間としての《強さ》と《自尊》を保証する。（Ⅲ二一九七—三〇〇、D九七五—九九九）

このことが逆に、全体主義プロパガンダの反功利主義を説明する。ナチズムの全般的崩壊の混沌とした不安定性にあって、指導者が「諸君には闘いと危険と死を提供する」と叫ぶとき、大衆はいわば「死への衝動」に熱狂し、「無への献身」を決意する。この否定への決断によって生の昂揚を確認するのである。

それゆえ全体主義イデオロギーへの信仰と無への献身を持続させるためには、全体主義運動は不安定性を維持する《無窮運動》でなければならない。この終わりのなき運動こそ、全体主義を特徴づける性格である。この安定化を拒否する反制度的運動について、アレントは次のように言っている。

「彼ら（ナチスとボルシェヴィキ）の狙いは国家や単なる暴力装置ではなく、決して止まることのない運動のみが達成しうること、すなわちすべての人間一人一人を絶えずあらゆる面で支配することだった。暴力としての権力は、全体主義的な支配にとっては決して目標ではなく手段であり、所与の一国における権力の掌握は歓迎すべき過渡的段階にすぎず、運動の終着点ではない。運動の実際上の目標は、可能な限り多くの人々を運動の中に引き入れ、組織し、昂揚させることである。しかし運動が終息する地点となるべき政治的目標となると、そのようなものはいまもなく存在しないのである。」（Ⅲ四〇、D七〇二、E三二二六）

イデオロギー的虚構を《現実》に変え、人々を組織してこの《虚構の現実》に従って行動させる全体主義運動が権力を掌握することは、現実の世界に直面し、イデオロギーとプロパガンダの虚構性、あるいは教義による事実の

無視を維持することが困難になることを意味する。それゆえ全体主義支配は、矛盾する二重の課題を背負い込んでいる。一方では、運動の虚構の世界を日常において実証するだけでなく、日常生活全体を支配し現実として確立しなければならぬ。いわばイデオロギーに合わせて現実を作り変えなければならない。しかし他方では、この新しい世界が安定して日常化することを妨げなければならない。それゆえ、アレントによれば、国家による支配そのものを永続的に不安定化あるいは更新していく必要がある。その意味で、ドイツとロシアの統治の無定形さは計画的であり、運動の一部であった。「一枚岩的国家構造」というイメージほど「全体主義支配機構の現実に一致しない」ものはない¹²。むしろ、とくにナチズムにおける党と国家の機関の重複とヒエラルキーの不明確さは、「指導者原理」に適合的であった¹³。

テロルこそ全体主義体制の本質であると記述したとき、アレントが意味していたのは、テロルは専制政治におけるような単なる手段ではなく、終わりなき目的そのものであるということであった。その目標は個人を非人間化するにせよ、個人を人類の単なる標本にするにせよ、人間存在を「余計者」(Überflüssigkeit, superfluousness)にすることであった。強制収容所や絶滅収容所における戦慄すべき殺戮を支えていたのは、全体主義イデオロギー、つまりすべてを決定づける「自然の法則」(人種)と「歴史の法則」(階級)である。「劣等」人種は自然淘汰の運命を加速させて絶滅しなければならぬし、「歴史」によって「死滅する」ことを運命づけられた「階級」もまたそうである。

テロル政治は、人間から個性の剥奪、つまり個人の単なる存在の中にも、人間の私的な生活表現にも必ず現われてくる自発性という人間の能力を抹殺し、人間性そのものを変容していわばバブロフの犬にすることをめざす。個

人的特異性、すなわち「道徳的人格の殺害の後、人間が生きた屍になることを阻止すべく残っている最後のもの」であり「人間本来のアイデンティティ」である人間の人格の個性性・唯一性を根こそぎにしようとする。アレントは、この人間の尊厳の基礎を破壊し、人間を「余計者」として取り扱うテロル政治を「根源的な悪 (radical evil, Das radikale Böse)」と呼んでゐる。(Ⅲ二六六、D九四一、E四五九)

「収容所は単に人々を絶滅させ、個人を辱めることのためにあるのではなく、科学的に厳密な条件のもとで人間の行動様式としての自発性というものを除去し、人間を同じ条件のもとでは常に同じ行動をするもの、つまり動物ですらないものに変える恐るべき実験のためにもある。動物ですらないというのは、周知のように腹が減ったときではなく鈴が鳴った時に餌を食うように仕込まれたバブロフの犬は普通の動物ではなく、本性をねじまげられた動物だったからだ。」(Ⅲ二二一、D九〇七、E四三八)

「全体主義支配は無限の多数性と多様性を持ったすべての人間が集まって一人の人間をなすかのように彼らを組織することをめざすが、すべての人間を常に同一の反応の塊に変え、その結果これらの反応の塊の一つ一つが他と交換可能なものとなるまでもっていかないかぎり、この全体主義支配というものは成立しない。」(Ⅲ二二一、D九〇七、E四三八)

それは、たとえばナチズムにおけるように、「自分が生きるのも死ぬのも自分の種の維持のためだと自覚している」(ヒトラー) という類の人間を作り出すことである。このような全体主義の野望は、いわば地球規模で人間存

在を交換可能な「同一の反応の塊」に作り変えることなしには成就されなかったであろう。だが、実質的には成就されたということもできる。強制収容所という世界において、すなわち全体的支配の実験室において。(Ⅲ二六〇、D九三六、E四五五)

強制収容所および絶滅収容所は、人間は全体的に支配されうるものであるという全体主義体制の基本的な主張が正しいかどうかを試す実験室となる。ここで問題なのは「すべてが許されている」ということだけではなく、「すべてが可能である」というイデオロギーの「超意味 (super-sense)」の正しさを証明することである。(Ⅲ二六四、D九三九、E四五七)

「収容所のなかに作られる死の社会こそ、人間を全体的に支配することを可能とする唯一の形式であることがあきらかになる。その後全体的支配を要求する人間がしなければならぬことは、個人の単なる存在のなかにも必ず現れてくる自発性をことごとく取り除き、それが非政治的な、もしくは無害な現れ方をしようがしまいとまったく関係なく、人間の最も私的な生活表現のあらゆる形式のなかにこの自発性を嗅ぎ出すことである。パブロフの犬は最も基本的な反応に還元された人間動物の見本であって、いつでも殺して、同じ行動をする他の反応の束と取り替えることができる。このパブロフの犬こそ全体主義国家の〈市民〉のモデルなのだが、収容所の外ではこのモデルは常に不完全な形でしか作り出せないのだ。」(Ⅲ二六〇、D九三六、E四五六)

「全体主義イデオロギーの本来の目標は、人間存在の外的条件の改変でも社会秩序の革命的な変革でもなく、人間の自然(本性)そのものの改変なのだ。そして強制収容所のなかで問題になるのはこの改変なのであって、そこで人々が蒙る苦しみ——苦しみはこの地上にはいつもありあまるほどあった——でも、いかに多くの人間が

そこで死んだかということでもない。」(Ⅲ二六五、D九四一―二、E四五八)

「全体的支配はわれわれが通常推論の手段とし、またわれわれが通常そのなかで行動している意味連関というものをことごとく破壊する一方、〈超意味〉とでも言うべきものを他方で作り上げる。最も不条理なものまで含めてすべての行動、全ての制度が、この超意味によってわれわれには思いもよらなかつたほどすつきりした形でその〈意味〉を与えられる。全体主義社会の無意味性の上に君臨するのは、歴史の鍵を握りあらゆる謎の解決を見つけたと称するイデオロギーの持つ〈超意味〉なのだ。」(Ⅲ二六三、D九三九、E四五七)

「人間の常識は現実というものを熟知していると主張し、のみならず現実のみが自分の領分だと主張するが、全体的支配がこのイデオロギーの超意味から現実の世界、現実的に機能する世界を作り出し始めるや否や、この超意味に対して何事もなし得ない。」(同)

以上記述してきたような強制収容所における個性の剥奪、自発性という人間の能力の抹殺、個人的特異性(「道徳的人格の殺害の後、人間が生きた屍になることを阻止すべく残っている最後のもの」)、人間の人格の個性性・唯一性の破壊、総じて人間性そのものの破壊は、強制収容所における死の匿名性という事態に連動している。そこでは統計的な死を強制することによって、個人の死が記憶される権利を否認した。それは、各人が人間であることの否定の結果である。強制収容所におけるこの生と死の抹殺こそ全体主義の「根源的な悪」(radical evil, Das radikale Böse)」¹⁴⁾

「強制収容所および絶滅収容所の真の恐ろしさは、そこに収容された人々がたとえ偶然に生き残っていたとし

ても、死んだ人間以上に生者から切りはなされているという事実にある。なぜなら、恐怖政治は忘却を強いるからだ。」(Ⅲ二三九、D九一五、E四四三)

つまり、この世界で一人の人間が殺される場合、殺害者はわれわれの知っている生と死の世界の中で動いている。かれは自分の犠牲者が存在しなかったなどと主張はしない。手がかりを消すかもしれないが、それは自分がだれであるかを示す手がかりであって、犠牲者の記憶やかれが愛した人々の悲しみを消したりしない。「一人の人間が生きていたという事実」を消滅させるのではない。ところが「忘却の穴」で起こる生と死は、世界内におけるその人の存在そのものの抹殺なのである。外見や、それによる記憶の領域が抹殺され、人の死はその人自身のものでなくなる。(Ⅲ二三九、D九一五、E四四三／Ⅲ三三八、D九一五、E四四二)

西欧世界ではその最も暗黒の時代ですら、殺された敵にも追憶される権利を認めてきた。ローマ人はキリスト教徒が殉教者伝を書くことを許したし、教会は異端者を人間の記憶にとどめた。だから、「人間は常に自分の信条のために死ぬことができた。」だが――

「強制収容所は死そのものすら無名なものにすることで――ソ連ではある人間がすでに死んでいるかまだ生きていたのかを突き止めることすらほとんど不可能なのだ――、死というものがいかなる場合にもつことができた意味を奪った。それはいわば、各人の手から彼自身の死を剥ぎ取ること、彼がもはや何ものも所有せず何人も属さないということを証明しようとしたのだ。彼の死は彼という人間がまだかつて存在しなかったというこの確認にすぎなかった。

人間の道徳的人格というものが社会および他の人間との共同生活に根ざしている限り、道徳的人格のこの毀損に抗してなおかつ次のような態度をとることができたらう。すなわち、自己の良心と、死の先手として生きるより犠牲者として死ぬほうがとにかくましだという主観的な心の慰めとに頼ることである。全体主義政府は、道徳的人格の個人主義的な逃げ道を、良心の下す決断そのものをまったく不確かな曖昧なものとすることによって封じてしまった。」（Ⅲ二五四、D九三〇、E四五二）

この「道徳的人格の破壊」にはもう一つ深刻な側面があった。それは良心そのものが不適切であつたり無関係であつたりする環境が生み出されたことである。アレントは、「友人を裏切つて殺すか、それとも、あらゆる意味で自分が責任を持つ妻や子供たちを死に追いやるかと、二者択一を迫られた」とき、そのどちらを選択するとした場合に、良心の決定など「まったくいかかわしく両義的な」ものになるという。（同）もちろん、アレントは、ドイツの収容所内には当局に協力する囚人の複雑な階層制があつたこと、実質的にすべての活動が憎むべき囚人（Kapo）によつて監視されていたことを無視してはならない。重要なことは、良心的な行動は自己破壊を招く道であつたので、自由意思と道徳的人格は破壊されたということである。プリモ・レヴィの証言によれば、「収容所には犯罪人も狂人もいない。違反すべき道徳律がないから、犯罪者がいるわけがない。自由意思を欠いているのだから狂人などいるわけがない。時間と空間が決められて行つていたわれわれの行動以外に、どんな行動も考えられなかつたのである。」¹⁵

被収容者が「人形のように死に向かつて行進していく」という恐ろしい光景を生み出した全体主義の実験室では、耐え難い肉体労働、十分な衣服、休憩、食糧の供給停止などのあらゆる身体的虐待や拷問が行われた。人間を「生

きた屍」にし、動物的な単なる「反応の束」を示すだけの存在に墮すこと、これこそが全体主義の勝利なのであった。

プリモ・レヴィも『アウシュヴィッツで生き延びて』で、強制収容所の勝利とは、収容されている人々が「匿名の死を迎えるずっと以前に、魂の死を迎えている」ことであると述べている。レヴィは、収容所内の診療所(Krankenbau あるいはKaBeと呼ばれた)に移されたとき、被収容者が人間性を剥奪されつつあることを観察しただけではなく、自分自身の人格と人間性も奪い去られたことを深く銘記することになった。

「(労働への出発の際に) この音楽が演奏されるとき、われわれの仲間が霧の中を機械人形のように行進していることをわれわれは知っている。彼らの魂はすでに死んでおり、その音楽はあたかも風が枯葉を吹き飛ばすごとく彼らの意志そのものとなり、彼らを追い立てる。そこにはもはやどんな意志もない。ドラムを打つ音が一つ響くたびに一歩ずつ進む、疲れ果てた筋肉の反射的な収縮にすぎない。(……) 彼ら全体が灰色に塗られた一台の機械である。彼らにはまさに文字通り断固とした決意がある。なぜなら、彼らは何も思考せず、欲望をもたない。彼らはただ歩く。」¹⁶

アレントは、「地獄絵図」という文章で、この「忘却の穴」における死の状況を次のように描写している。

「まず意図的な無視、剥奪、恥辱が加えられた。そのとき死んだのは、体の弱い人と抵抗して自死を選ぶ力の

あつた人だつた。次は強制労働と完全な飢餓であつた。人々は数千人単位で、体力に応じて様々な時間の間隔をおいて死んでいった。最後は死の工場だつた。そこでは若者も年寄りも、弱者も強者も、病人も健康な者もみな死んでいった。人間としてではなく、男性や女性としてでもなく、子供や大人、少年や少女としてでもなく、人の善し悪しや美醜にも関係なく死んだ。彼らは生物そのものという最低の公分母にまで貶められ、この上なく暗く深い原初の平等性の淵にまで追いやられ、家畜や物のように、肉体も魂もなく、死が刻印される外観もない物質であるかのように死んでいった。¹⁷⁾

この運動の永続化のための重要な要素が《敵》の存在であつた。しかし全体主義支配は、公然あるいは隠然の実際の敵を探し出すことよりも《客観的な敵》を攻撃することによってこれを行った。個々の人間や集団がどういう行為をしたかには関係なく、人種的な敵や階級的な敵、さらには民族的な敵といった「客観的な敵」を創造し、迫害・追放・抹殺した。ナチスは、ユダヤ人の絶滅からポーランド人、さらには「人種的に不適格な」ドイツ人を処理する計画を立てていた。スターリンは「階級としてのクラーク（富農）」の絶滅、党内部の「人民の敵」、タター人などの民族を絶滅の対象にした。「人民の敵」概念の形成が不可欠であるがゆえに、共産主義全体主義体制は、「テロル」を必要としたのである。その装置は、強制収容所、監獄、秘密警察、見せしめ裁判、公開処刑、各種拷問テクノロジーなどである。このテロル装置によって、〈共産主義ジェノサイド〉が行われたことを忘れることはできない。

アレントは、全体主義における秘密警察とテロルは現実の反対派が一掃されたと思われたときにこそ始まるという。その任務は「客観的な敵」の攻撃である。その目的は、すでに述べたように国家を運動の中に巻き込み続ける

ためである。国家機構としての警察と監獄は刑法の法的保護体系を前提とし、軍隊は国民であることを前提とするが、秘密警察とテロルはこれらの「法律的にもしくは国家的な構造」とは全く異質であり、いわば制度否定の上にしたった運動機関である。

アレントは、強制収容所を「全体主義支配の実験室」と呼んでいるが、ここで実験されるのは自由と自発性を除き、組織的に人格を破壊して、人間を同じ条件のもとでは常に同じ行動をするものに作り変えることであると見て、次のように述べている。

「全体主義的支配は無限の複数性と多様性をもったすべての人間が集まって一人の人間をなすかのようにかれらを組織することをめざすのだが、すべての人間を常に同一の反応の塊に変え、その結果これらの反応の塊の一つ一つが他と交換可能なものとなるまでもっていかない限り、この全体主義支配というものは成立しない。ここで問題なのは、現に存在しないもの、つまりその唯一の『自由』といえは『自己の種を保存する』ことしかないような種類の人間といったものを作り出すことなのだ。全体主義的支配は精鋭組織に対するイデオロギー教化と同時に、収容所における絶対的テロルによつてこの結果に到達しようとする。」(Ⅲ二二一、D九〇七、E四三八)

そのためにこそテロルが用いられる。「全体主義的支配は、歴史あるいは自然の過程を発進させ、その運動法則を人間社会のなかで貫徹させるためにテロルを必要とする。」(Ⅲ二七六、D九五三) なぜかといえば、「自然もしくは歴史の過程の従順な実行者としてのテロルは、人間と人間のあいだの空間——それが自由の存する空間にほか

ならないが——を完全に無にしてしまうことによって、人間たちを一つにすることをなしたげたのである。全体主義的支配の本質をなすものは、それゆえ（中略）あるがままの人間たちをむりやりにテロルの鉄のたがのなかに押し込み、そのようにして行為（活動）の空間——そしてこの空間のみが自由の現実態なのだ——を消滅させてしまうことにあるのである。」（Ⅲ二八一、D九五八）

これまで何度も見てきたように、制度の崩壊と革命の破局的発展によって人びとがそれまでの通常の正常なコミユニケーション回路を失うという時代の病理が、全体主義プロパガンダの温床となった。テロルとイデオロギーの論理性が猛威を振るうのは、「政治的および物理的な故郷喪失」と「精神のおよび社会的な根なし草」がもたらす「見捨てられた孤独な状態」の絶望においてであった。

この全体主義イデオロギーは、人間性を作り変えることも事実を改変することも、「すべては可能である」と主張するが、アレントによれば、その根底にあるのは人間の全能性の追求である。その代償となるのは人間の複数性と自発性である。全体主義の指導者たちは、人種法則と歴史法則という超意味的法則の従順な僕（しもべ）であると信じ、その法則の命令に従っているだけだという。それゆえ、人間の複数性と自発性を破壊することも可能となる。

アレントのいう全体主義イデオロギーにおいて重要なのは、事実による反駁を許さない、という全面的に閉じた体系の根底にある信念であった。それは、人種理論であれ階級闘争理論であれ、過去と未来を説明する論理的一貫性を持つ唯一の理論であると主張する。そして、人種闘争と階級闘争の果てしない闘争の中に歴史の鍵を見つけたという信念に合わせて行動する論理的一貫性を誇りにしていた。そこでは、真理と虚偽の区別は意味をなさない。

不都合な事実があつてイデオロギーと合わないなら、イデオロギーではなく事実を作り変えればいいだけの話になる。¹⁸⁾

ツヴェタン・トドロフも同様に、全体主義イデオロギーの出生証明書は、(一) 千年王国思想の希望、(二) 革命的暴力と暴力の使用を前提とする革命的精神、(三) 「科学主義」思想に支えられた「宇宙」の全面支配という三つの要素からなると述べている——「新しい人間が住む新しい社会を創造し、あらゆる問題を、これを最後と解決しようという計画、その実現のために革命を必要とする計画」である。とくに〈救済〉や〈絶対〉への欲求、〈超越性〉への欲求が重要である。だが革命的暴力と千年王国思想だけでは全体主義に導くことはできない。ユートピアの希求と科学主義の信念だけでもそうである。全体主義はこの三つの要素の結合を要求するのである。そのとき全体主義は初めて「レーニン、スターリン、ヒトラーは大衆によって求められ、愛されることができた」のである。¹⁹⁾

一般に科学研究が要求するのは真実を探求することのみであつて、ドグマに服することではないが、全体主義が採用した科学主義は一つの世界観、あるいは科学によつて証明されたと称する真理に盲目的に服従することを要求する信仰であつた。共産主義者もナチス党員も真理の探究ではなくドグマへの服従を強制した。一方は「ユダヤ的身体」(アインシュタイン)を断罪し、他方は「ブルジョアの生物学」(メンデル)を断罪する。ソ連ではルイセンコの生物学、パプロフの心理学、マールの言語学に異議を唱えることは、強制収容所に送られる危険を冒すことであつた。

トドロフによれば、全体主義イデオロギーは「科学主義」のなかに人間社会に関する根本的なテーゼを見出した。すなわち「生命の法則とは情け容赦のない闘争であり、戦争である」というテーゼである。自然淘汰と適者生存の

ダーウインの思想は単純化され、硬化されて人間社会に適用される。ダーウイニズムそのものであれ、エンゲルスが「歴史学のダーウイン」と呼んだマルクスの教義であれ、科学主義は階級闘争、人種間闘争、民族戦争において、生命と歴史の一般法則としての仮借ない闘争の理念を見出すのである。世界の真実とは、世界は二つの階級、二つの人種、友と敵に分かれており、情け容赦なき闘いを交えることである。それは自然淘汰と歴史淘汰の宿命であり、その法則を人為的淘汰によって促進させることは正しいとされる。そのとき「暴力」は正しい社会の現前化を促進する〈歴史の助産婦〉となるであろう。²⁰⁾

全体主義の国家は、科学主義のドグマとユートピアの実現のために適合した道具を備えなければならない。「テロル」である。「従わなければ地獄に落ちる」という宗教と結びついたかつての専制支配の脅しは、地獄も悪魔も信じない人間には有効ではない。その存在を証明できない架空の地獄の代わりに、現実の地獄を創造しなければならぬ。ニコラ・ヴェルトがいうように、万人の無条件の服従を生み出す絶滅収容所は必要でなく正当でもある。「科学を所有する存在は、無制限の恐怖を真実に仕えさせる」のである。こうして「道徳的な嫌悪感から解放され、あらゆる残忍な行為を行う用意のできている従順な機械たち」からなる専門集団が作られた。ソヴェエト政治警察の創設者ジェルジエンスキーは、自分の部下を「断固として非情で心の迷いのない確固たる仲間たち」と記述している。²¹⁾

全体主義の戦略家はある意味で、独自の人間認識において民主主義国の住民、少なくともその代弁者より優れている。後者は、人間が求めているのはより多くの快適さ、便利さ、より多くの物質的欲望の充足であると信じてきた。だが人間は快適さや物質的豊かさだけで生きるのではない。自分の生に意味があることを、世界の秩序の中で自分の存在が確実な居場所を持つていることを、自分と絶対的なるものとの確かな結合を希求しているのである。

全体主義はこの深部からの人間の叫び、「超越性への人間的欲求」に応えると主張した。そのためには、ヒトラーは「諸君に死を要求する」と言い、その通りになったのである。

トドロフはまた、レーニンが常用した、敵を露骨に非人間化しようとする言葉、あくまで敵を排除し絶滅させることに関わる語彙（「血みどろの絶滅戦争」、「反革命的なごろつきを屈服させる」など）を手掛かりに、全体主義の科学主義テーゼに支えられ、また逆にそのテーゼの現前化を推進しようとしたソヴェエト政権の恐怖政治について次のように述べている。

「これらの原則の政治への字義とおりの翻訳は、内政のレベルでは、あらゆる領域に及ぶ恐怖政治の実践を開始させる。レーニンはソヴェエト国家が登場したときから恐怖政治を導入し、これを包み隠さず擁護するだろう。『恐怖政治は原則として政治では正当であり、恐怖政治の基礎となりこれを正当化するはその必要性である』ことを公然と認めなければならぬ。』共産主義諸国では『プロレタリアート独裁』は警察による恐怖政治を意味するコードネームと化す。これでもって、大量殺戮、拷問、および身体的暴力の脅威を理解しなければならぬ。これにつけ加えられるのが、あの特殊でことのほか便利な制度、すなわち強制収容所である。全体主義国家はすべてこれを所有している。収容所での生活は同時に自由の剥奪であり拷問である。それは矯正訓練所である。収容された人たちはそこから出ることができるとは決して思っていない。国の残余の部分にも別種の恐怖が君臨している。どこでも恒常的におこなわれている監視のおかげで、一切の不服従の行為、あるいは現行の規範からのちょっとした逸脱でさえ告発される可能性があり、その当事者は、ある場合には強制収容所送りの刑に処せられたり、ある場合には仕事や住居が剥奪され、本人だけでなく子供からも、大学に入学したり外国旅行し

たりする権利が剥奪される、云々である。⁽²²⁾」

このように千年王国を生み出す外科手術としての革命は、テロルとテロル装置を正当化するが、それは、一方で「敵」、即ち「歴史の恩寵」（共産主義的救済）のために歴史の法廷で有罪を宣告されなければならない。「敵」を除くためである。そのためテロルの専門家集団は、「道徳的嫌悪感から解放され、あらゆる残忍な行為を行う用意ができている従順な機械たち」でなければならぬ。このテロル装置の中心が、万人の無条件の服従を生み出す「絶滅収容所」である。そのさい重要なことは、「彼らは何者かであることによって罰せられるのであって、何をするかによって罰せられるのではない」ということである。

すでに指摘したように、エンゲルスはマルクスを「歴史学のダーウィン」と呼んだが、その意味するところは、自然淘汰（歴史の必然性）と人為的淘汰（革命と粛清）とによって「至福千年王国」を創ることにあった。それゆえ恐怖政治は、共産主義的全体主義体制の土台そのものなのである。トドロフは言う——「恐怖政治は非合理的なものではない。それは逆に不可欠なのである。個人の一切の自律を破壊するために必要なのである。強制収容所はこの体制の象徴と化す。それは同時に、この体制の隠された真実を暴き出す⁽²³⁾。」

全体主義運動（闘争）が制度化して権力を掌握した段階では、公式イデオロギーはみせかけ（「中身の無い貝殻」となるが、しかし不可欠であり、レトリック上の一貫性を持ち続ける。（R・アロンのいう「似非イデオクラシー（pseudo-ideocracy）」）しかし、イデオロギー的虚構を《現実》に変え、人々を組織してこの《虚構の現実》に従って行動させる全体主義運動が権力を掌握することは、現実の世界に直面し、イデオロギーとプロバガンダの虚構性、あるいは教義による事実の無視を維持することが困難になることを意味する。それゆえ全体主義支配は、

矛盾する二重の課題を背負い込むことになる。一方では、運動の虚構の世界を日常において実証するだけでなく、日常生活全体を支配し現実として確立しなければならない。いわばイデオロギーに合わせて現実を作り変えなければならない。しかし他方では、この新しい世界が安定して日常化することを妨げなければならない。それゆえ、アレントが繰り返し述べたように、国家による支配そのものを永続的に不安定化あるいは更新していく必要がある。その意味で、ドイツとロシアの統治の無定形さは計画的であり、運動の一部であった。「一枚岩的国家構造」というイメージほど「全体主義支配機構の現実に一致しない」ものはない。この運動の永続化のための重要な要素が《敵》の存在であった。しかし全体主義支配は、公然あるいは隠然の実際の敵を探し出すことよりも《客観的な敵》を攻撃することによってこれを行った。個々の人間や集団がどういう行為をしたかには関係なく、人種的な敵や階級的な敵、さらには民族的な敵といった「客観的な敵」を創造し、迫害・追放・抹殺したのである。

トドロフは、本稿本章の前節（「ナチズムとコミュニズム」）で様々な角度から見てきた共産主義的全体主義独裁制（communist totalitarian dictatorship）を「階級的全体主義」と名付け、それが西側の人たちの心を捉えたのはなぜかを改めて問い、ナチズムの「人種的全体主義」のホロコーストに匹敵する、否、はるかにそれを超える民衆虐殺をどう呼ぶべきかと問うている――

「西欧的民主主義になかに住んでいる者は、全体主義は通常の人間的希求とはまったく無縁のものと信じている。しかし、もしそうだったら全体主義があればど多くの人を巻き込んで、長いこと存続することはなかったことだろう。それは反対に恐るべき効率をもった仕組みなのだ。共産主義のイデオロギーはよりよい社会へのイ

メージを描いて見せて、我々に憧れの気持を抱かせる。理想の名において世界を変革しようと望むことは、人間が人間であることの不可欠な一部ではないだろうか？（……）その上、共産主義社会は個人が責任を取ることをなくしてしまふ。決定するのはいつも『彼ら』だからだ。責任をとることは、しばしばしんどいものだ。（……）きわめて多くの個人が無意識に感じた全体主義システムの魅力は、自由と責任に対するある恐怖からきている。このことが全体主義体制の人気を説明している（E・フロムの『自由の恐怖』の主題はまさにこれだ）。ラ・ボエシーが言っていることだが、『自発的隷従』が存在するのだ。

自ら進んで隷従に殺到する人びとの共犯は、必ずしも抽象的で理論的なものでなかったし、現在もそうだ。真実を隠蔽するための宣伝を受け入れたり、あるいは広めたりするというたんなる事実が、積極的な共犯だったし、常にそうなのだ。」

『階級的全体主義』の差別と排除のメカニズムは、『人種的全体主義』のメカニズムに類似したものとなった。将来のナチスの社会が、「純粋な人種」を基礎に作られねばならないように、未来の共産主義社会は、あらゆるブルジョアの汚物から拭かれたプロレタリア的民衆の上に打ちたてられるべきだとされた。排除の基準は違っても、これら二つの社会の建設は同じように構想された。したがって共産主義がユニヴァーサルイズムだと主張するのはまちがっている。たとえそれが世界的使命を計画に持っているとしても、ナチズム同様、共産主義は人類の一部を生存に値しないと宣言しているからだ。相違があるとすれば、それはナチスが人種的、地域的に区分するのに対して共産主義は階層・階級によって区分している点である。レーニン主義、スターリン主義、毛沢東主義の悪業とカンボジアの経験は、したがって人類に対して——とくに法律家と歴史家に対して——新しい疑問

を投げかける。敵対する個人またはグループとしてではなく、政治的・イデオロギー的理由から、大規模な形で社会の一部を根絶しようとするこの犯罪は、なんと名付けたらよいのだろうか。何人かのアングロ・サクソンの研究者は『*politicide*』（政治的殺人）という言葉を提案している。あるいはチェコの法律家のように『共産主義的犯罪』とよんだらいいだろうか。⁽²⁵⁾」

アロンは、ソヴィエト全体主義を「似非イデオクラシー（*pseudo-ideocracy*）」として分析している。本稿第一章「知識人の阿片」で詳しく検討したように、アロンは、西欧左翼知識人を強力に惹きつけたマルクス主義イデオロギーこそ、ソヴィエト全体主義支配の基柱であったことを分析した。進歩と解放を「夢想」した左翼知識人は、このイデオロギーの麻薬効果によって、テロル（恐怖政治）の事実を見ることができなかった。

ソヴィエトでは、国家は党から切り離すことはできず、党は決定論的歴史観に裏付けられたイデオロギーを正統性の源泉としている。この歴史観は、社会の最終的形態に向けての進歩を明らかにするだけでなく、階級間および善・悪の闘争に終止符を打つ。そしてあらゆる組織は、このような国家と党の表現（国家・党によって設立され管理される公式組織）であり、公式イデオロギーが染み込まれている。しかしながら、国家・党と社会を動かす歴史運動は、明らかに矛盾する二つの特徴を持っていた。即ち理論（教義）上は、党・国家の使命はプロレタリアートと歴史の法則の表現であり歴史的決定論に支配されているが、実際は少数のグループ、しばしば一人の人間によって下された結果である。アロンの卓抜な分析によれば、「ソヴィエト・ドクトリンの聖なる歴史は、ますます生産諸力の発展の歴史ではなくなり、ますます党それ自体の歴史となる。革命をもたらした出来事の聖なる歴史はボルシェヴィキ党、そして党内闘争の歴史である。⁽²⁶⁾」

レーニンとボルシェヴィキの著しい特徴は、客観的な歴史的発展論を打ち破ったことである。即ち歴史的決定論を受動的に受け入れることを拒否し、自発主義（主意主義）を採用したことである。レーニンはマルクス主義ドクトリンを犠牲にし、以前、原理において断罪した行動を正当化するのをためらわなかった。プロレタリアートの任務（使命）は党の使命に代わり、党が行うすべてのことはプロレタリアートと歴史の法則の表現であると歪曲されたが、党の行動はきわめて恣意的であった。マルクス主義ドクトリンは、過渡期の国家の形態を定義しなかったし、戦時共產主義、ネップ、五カ年計画は予測し得なかつた状況に対するボルシェヴィキの反応でしかなかった。この反応はボルシェヴィキによるマルクス主義の解釈によって影響されたが、しかし歴史の法則によって決定されたのではなかった。ドクトリンは歴史的決定論に訴えるが、実際には決定は少数の集団あるいは一人の人間の手に委ねられているという根本的矛盾である。²⁷⁾

アロンによれば、マルクス主義イデオロギーは統治の手段（道具）である。しかし、そのドクトリンは権力の道具であり、ソヴェエト指導者は彼ら自身のドクトリンを信じていないと考えるのは過ちである。ボルシェヴィキは、権力を防衛し拡大するために、手に入るいかなる思想をも利用する純粋な機会主義者ではない。「教義上の狂信主義と戦術と実践における柔軟性との混合」が彼らの特徴の一つである。²⁸⁾

このような、ドクトリンにおいては歴史的決定論に訴えるが、実際には決定は少数の集団あるいは一人の人間の手に委ねられているという根本的矛盾は、幾つかの矛盾あるいは欺瞞として現れる。一つは、独裁の正当化（欺瞞）である。プロレタリアート独裁の公式が、党があくまで守ろうとする権力独占（経済管理手段、行政手段、情報・宣伝手段、教育手段、強制手段など）を正当化するために用いられ、民主集中制の公式が、数人あるいは単一人の人間の全能をカモフラージュするために用いられる。²⁹⁾

もう一つは、公式イデオロギー体制の最も顕著な結果ともいべきテロルの使用である。権力を独占する党のあの側面を理解するには、テロルという現象が説明されなければならない。アロンは、三種類のテロルの具体的、実質的分類を行っている³¹。第一の形態は「政党あるいは党派が敵対する政党・党派に対して用いたテロル。ボリシェヴィキは、一九一七年から二一年までの内戦期に社会革命党とメンシェヴィキを排除・投獄した。以前の特権階級の代表たちも勝利したボルシェヴィキに抵抗した。これはすべての革命の辿る道でもある。革命期、権力を握った集団はいつまで権力を維持できるか常に不安に駆られ、至る所で敵を見出した。

第二の形態は「階級敵クラークを消滅させるために行われたテロル。農業集団化が始まった二九年―三〇年頃に解放されたテロルである。集団化決定により家畜の半分を屠殺、数十万のクラークが追放された。

第三形態は「政治的敵対者や階級的に對して用いられてきたテロルを共産党内の現実のあるいは潜在的な反対派あるいは異論派に對して向けたテロル。第二〇回党大会におけるフルシチョフの秘密報告によれば、「第十七回党大会の代議員一九六六名のうち、一一〇八名が反革命罪で逮捕された。」これは中央委員の七〇%、党大会代議員の五〇・八〇%であり、最も恐るべき異常なテロルであった。一九一七年から三六年まで革命的テロルは、体制の安定に比例して徐々に和らぐのではなく、強化された。三四年以後、共産党の古参黨員のほとんどが根絶されてしまふと、テロルはさらに強化され、強制収容所とモスクワ公開裁判（イデオロギー的テロルの頂点）を生み出した。被告たちは、——今日明らかにされているように——彼らが犯しはしなかったし、良心を持っている人ならだれでも彼らが犯したとは信じなかった犯罪を自白した³²。

アロンは、以上のようにソヴェエト全体主義をイデオロギーとテロルの結合した「イデオクラシー」体制として分析した。

H・アレントやT・トドロフ、R・アロンが繰り返し主張しているのは、全体主義が歴史上まったく新しい、先例のない何かのだ、ということである。全体主義は単なる暴政の一形態ではないし、その特徴は残酷性や犠牲者の数だけにあるのではない。「つねに地上にはたくさんあった苦難が問題なのではないし、犠牲者の数が問題なのではない。人間の本性そのものが問題にされているのだ」という事態である。等式的に言えば、〈全体主義〉「人間の本性を変える」＋「すべては可能である」という信念であり、その信念を支えるのがイデオロギーの役割であり、それを執行するのがテロルであった。

アレントは、収容所を「すべては可能である」という全体主義の基本的信条が実証される実験場」と記述しているが、その意味は、全体主義は人間から個性と自発的に行為する能力を奪うことによって人間を「人間の顔をした動物の見本」に変える試みである。それはアレントが『人間の条件』で探求した、人間が人間である条件、つまり個性と活動と思考を破壊する試みである。

アレントが言うように、全体主義権力が最も恐れたのは民衆の生得の自由への愛ではなく、「事実に基づく真実 (factual reality)」であった。それは、唯一絶対の教義およびこの教義に基づく検閲とプロパガンダによって作られた虚構の世界を崩壊させる可能性を持つからである。事実はどうのように抹殺・歪曲・創作しても対立と矛盾を免れることはできない。その結果、事実とは全体主義体制が国民に対して権力の継続的独占を正当化してきた虚構と神話を掘り崩す力を持つ。それ故、逆に真実の光は鉄のカーテンの内に浸透してはならない。「権力は事実との直接的対決を意味する」と観察したアレントは、「権力の座についた全体主義はたえずこの挑戦に打ち勝つことに関心をもつ」と述べている。(Ⅲ八一、D七四六、E三五二)

- (1) Hannah Arendt, *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, Deutsche Erstausgabe, 1955, 1 Auflage, 1986, s. 954-5; *The Origins of Totalitarianism*, New Edition, Harcourt Brace & Company, 1968, pp. 465-7; ハンナ・アレント (大久保和郎・大島かおり訳) 『全体主義の起源』3 『全体主義』みすず書房、一九八六年新装版、二七二-二七八頁。以下、本書からの引用・参照の注記は、次のように本文中に記す。(Ⅲ二七七-八、D九五四-五、E四六五-七) Ⅲは日本語版、Dはドイツ語版、Eは英語版第二版を示す。
- (2) デーナ・リチャード・ヴイラ (伊藤誓/磯山甚一訳) 『政治・哲学・恐怖 ハンナ・アレントの思想』法政大学出版社、二〇〇四年、第一章参照。
- (3) H. Arendt, "Mankind and Terror," in *Essays in Understanding, 1930-1954*, ed. by Jerome Kohn, New York, 1994, pp. 305-6. (以下 *EU* と記す。斉藤純一・山田正行・矢野久美子共訳『アレント政治思想集成 2 理解と政治』みすず書房、二〇〇二年、一九一-二〇〇頁。(以下『政治思想集成2』と略)
- アレントが繰り返り返し強調したのは、全体主義の恐怖は、既成の認識の枠組みでは理解できないということであった。全体主義の悪は過去の暴虐行為のように、「目的は手段を正当化する」といった功利主義によるものでも、権力欲に憑りつかれた指導者のマキャベリズムの結果でもない。それは伝統的な道徳規範の否認と指導者の誇大妄想の病理に還元できるものではない。全体主義に特有な悪を理解するためには、政治悪に関する西欧のリベラルな「偉大な伝統」からも、目的/手段の合理的モデルからも自由にならなければならないというのだ。*EU*, pp. 302-303. 『政治思想集成2』一一五-一一六頁。
- (4) Hannah Arendt, "On the Nature of Totalitarianism," in *EU*, pp. 345-6. 前掲書『政治思想集成 2 理解と政治』所収「全体主義の性質について」一七〇-一七二頁。
- (5) エリートへの公認の歴史記述への反感と壮大な贗造におけるマルクス(主義)の役割について、アレントは次のように記述している。「世界史を階級闘争の歴史として解釈し直そうとしたマルクスの試みは、このテーゼの客観的正しさを信じない人々をも魅了してきたが、それというのもこの試みが、公式の歴史記述から締め出された人々のために後世の記憶の中に一つの場所を確保してやろうとする意図によって導かれているからにはかならない。」(Ⅲ三〇一-二、D七二-三、E三三三-三)
- (6) アレントは、全体主義政権のこの疑似民主主義的な側面を最初に指摘したカールトン・J・H・ヘイズのシンポジウム(一九三六年)での発言を引用している。(Ⅲ二、D六五-八、E三〇六) G. J. H. Hayes, "The Novelty of Totalitarianism in the History of Western Civilization," In *Proceedings of the American Philosophical Society*, Philadelphia, 1940, Vol. 82. also cf. Robert C. Tucker,

"Introduction: Stalin, Bukharin, and History as Conspiracy", in Robert C. Tucker and Stephen F. Cohen (ed.), *The Great Purge Trial*, Grosset & Dunlap Publishers, 1965.

(7) すでに前世紀末の前衛芸術家たちは既成の文化、秩序、人間に対する憎悪と暴力崇拜に囚われていた。参照、アンドレ・ブルトン『シュールリアリズム宣言集』現代思潮社。なお、二〇世紀末において、エンツェンスベルガーはテロル政治の本質について次のように述べている。「二〇世紀に恐怖政治をおこなったいくつかの政権が人心を収攬できたことは、たぶん、つぎのことから説明がつくだらう。つまりそれらの諸政権は例外なく、蔑視されているひとたちに、かれらが承認されるような社会を——民族共同体という名であれ、無階級社会という名前であれ、信徒の共同体という名であれ——暴力的に作り上げてみせる」と約束したのだ。現実にはそれらの政権はどれも、万人に平等に承認を拒否するというかたちで、約束を解消してしまうのだけども。」H・M・エンツェンスベルガー(野村修訳)『冷戦から内戦へ』晶文社、一九九四年、五七頁。

(8) H. Arendt, *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, II Imperialismus, 8 Der Kontinentale Imperialismus und die Panbewegungen, 9 Der Niedergang des Nationalstaates und das Ende der Menschenrechte; *The Origins of Totalitarianism*, Part Two: Imperialism, Eight: Continental Imperialism: the Pan-Movements, Nine: The Decline of the Nation-State and the End of the Rights of Man. 大久保和郎・大島かおり訳『全体主義の起源 2 帝国主義』みすず書房、一九八六年新装版、第四章「大陸帝国主義と汎民族運動」、第五章「国民国家の没落と人権の終焉」。参照、マーガレット・カノヴァン(寺島俊穂訳)『アンナ・アレントの政治思想』未来社、新装版一九九五年。(Margaret Canovan, *The Political Thought of Hannah Arendt*, London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1974.) 同(寺島俊穂・伊藤洋典訳)『アレント政治思想の再解釈』未来社、二〇〇四年。(Margaret Canovan, *Hannah Arendt: A Reinterpretation of her Political Thought*, Cambridge Univ. Press, 1992.)

(9) ヒトラーは、ナチス運動の形成における世界観の役割を何度も強調した。『わが闘争』(角川文庫)第二部第一章「世界観と政党」他。彼はその中で、自分はマルクス主義政党の優秀さから政党が世界観の基礎を持つ必要があることを理解した、と述べている。(Ⅲ五六―五七、D七七一―八七二〇、E三三三六―三三三七)

(10) Hannah Arendt, "On the Nature of Totalitarianism", in *EU*, p. 350. 前掲書『アレント政治思想集成 2 理解と政治』所収「全体主義の性質(にらむ)」、一七六頁。

(11) アレント、同、一八四頁。H. Arendt, *op. cit.*, p. 356.

(12) Moshe Lewin, "Bureaucracy and the Stalinist state," in I. Kershaw and M. Lewin (ed.), *Stalinism and Nazism: Dictatorship in*

Comparison, Cambridge University Press, 1992. スターリンによる不可欠な機構としての官僚制の依存と破壊を「スターリン主義の不可能性」として分析している。

- (13) 「ナチス・ドイツには、強固で安定した支配機構はなく、党と国家の相互浸透による不安定な状況が進行し、それがかえってナチ組織や国家省庁から生き残ろうとするエネルギーを引き出し、ヒトラーの指導に従属させた。(……) ヒトラーはそれを常に『前方への逃避』、侵略への破壊的エネルギーに利用したのである。」木村、柴、長沼『世界大戦と現代文化の開幕』、中央公論社『世界の歴史 第二六巻』三三四頁。

- (14) シベリアの収容所を生き延びた詩人・石原吉郎は、共産主義の全体主義では、『死』においてもただ『数字』でしかないところに真の恐ろしさがあると云っている。「ジェノサイドのおそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかにひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしいのだ。(……) 死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばなければならないものなのだ。」(石原吉郎『望郷と海』みすず書房、二〇一二年、二頁。) 強制収容所には個人の死ではなく、統計上の死があるのみだ。

- (15) Primo Levi, *The Survival in Auschwitz and The Reawakening: Two Memoirs*, New York: Summit Books, 1985, p. 98.

- (16) Primo Levi, *op. cit.*, p. 51.

- (17) H. Arendt, "The Image of Hell", *Essays in Understanding 1930-1954 Formation, Exile, and Totalitarianism*, Schocken Books, New York, 1994. P. 198. 斉藤純一・山田正行・矢野久美子訳『アーレント政治思想集成1』所収「地獄絵図」みすず書房、二〇一二年、二六九頁。奴隷には価格があったが強制収容所には価格がないという言葉に示されているように、強制収容所は労働能率や経済的コストの計算を無視して設置され運営された。信じがたい残酷性と経済的無目的性。(Ⅲ二四一、D九一八、E四四四)

- (18) "Discussion: The Nature of Totalitarianism" in C. J. Friedrich (ed.), *Totalitarianism*, New York, 1964, p. 224.

- (19) ツヴェタン・トドロフ (大谷尚文訳) 『悪の記憶・善の誘惑』法政大学出版局、二〇〇六年、四七頁。

- (20) トドロフ、前掲書、四九頁。アラン・ブザンソン『ソヴェエト社会の解剖』も参照。

- (21) ニコラ・ヴェルト「第一部 人民に敵対する国家」、ステファヌ・クルトワ、ニコラ・ヴェルト (外川継男訳) 『共産主義黒書―犯罪・テロル・抑圧―ソ連篇』所収、恵雅堂出版、一九九七年。

- (22) トドロフ、前掲書、四九頁―五〇頁。

- (23) トドロフ、前掲書、八九頁。

- (24) ステファヌ・クルトワ「共産主義の犯罪」、ステファヌ・クルトワ／ニコラ・ヴェル、前掲書「共産主義黒書―犯罪・テロル・抑圧―ソ連篇」二二頁。
- (25) クルトワ、前掲書、二五頁。ワシーリー・グロスマンによれば、全体主義社会の原理は、マルクス主義理論で武装した公権力によってたどたどしく述べられる〈歴史〉の非人称的な法に服従させることであった。国家として指示することができるこの抽象的な実体の開花のために、個人の自由は完全に葬り去られた。個人の自律の完全な放棄と服従の強制を通じて、全体主義権力は生身の諸個人を、抽象的な実体が要求する人間に作り変えるという恐るべき誘惑にとりつかれていた。
- 人間の自由の否定と破壊のために国家が使用する恐怖政治は、それゆえ非合理的なものではない。それは不可欠であった。全体主義国家のテロル機関は、「この世に罪人はいない」というトルストイのテーゼをひっくり返して、「地上に無垢な人はいない」という上級のテーゼによってその任務を遂行した。自由意思で行動しようとする、他の個人の幸福を行動の目標としようとすることは罪人となる。この上級テーゼに従って、自由を廃絶すること、ひ弱で生ちよらいブルジョア人道主義を否定すること、その先に新しい「ホモ・ソヴィエティクス」を創造することをめざすのである。そのゆえ恐怖政治は合法的であり、強制収容所はこの体制の象徴となり、全体主義の隠された真実を暴き出すのである。トドロフ、前掲書、八八―八九頁。
- (26) Raymond Aron, *Democracy and Totalitarianism*, Translated by Valence Ionescu, Frederick A. Praeger, Publishers, 1969, p. 183. Cf. Brigitte Gress, 'The comparisons of totalitarianism of Raymond Aron and Hannah Arendt, in *Totalitarianism and Political Religions*, Volume 1: *concepts for the comparison of dictatorships*, edited by Hias Maier, Routledge 2004, translated by Jodi Bruhn. Originally published under the title *Totalitarianism und Politische Religionen: Konzepte des Diktaturvergleichs*, Vol. 1, Verlag Ferdinand Schöningh, Paderborn, 1996.
- (27) *Ibid.* pp. 181-182.
- (28) *Ibid.* p. 185.
- (29) *Ibid.* p. 178.
- (30) *Ibid.* pp. 185-186.
- (31) *Ibid.* pp. 187-189.
- (32) *Ibid.* p. 188.